



運転代行は突然に



浜田 英明

11月も後半、すっかり冷たくなった風はクリスマスの匂いをはらんでいた。世の中不景気と言いながら、やっぱり華やぐ金曜日。笑いと幸せがあふれる飲み屋街は人々の熱気やら、お店の看板や店内の明かりやらでキラキラ輝いていた。ケンジはそんな飲み屋街から少し離れた道路の隅に座り込んでいた。ケンジは飲み会に車で来たため、運転代行サービスを頼んでいた。その運転代行サービスとの待ち合わせ場所がこの飲み屋街からはずれた駐車場前だったからだ。背もたれにした電柱の冷たさを気持ちよく感じながら、ケンジはふーっとため息に似た大きな息を吐くと、久しぶりに気持ち良く泥酔できた自分を心の中でじっくり褒めた。

ケンジは今日、大学のゼミの飲み会に参加していた。ケンジは某一流大学の4回生。単位取得もほとんど済ませ、就職も決まり、あとは卒業まで遊びまわるだけという今時の大学生の中では優等生の部類に入る学生だ。そして今日参加した大学のゼミの飲み会は、メインテーマとしてはゼミの教授の敬い労いであるが、お約束通り教授が早々にお帰りになられると、あとは学生たちの馬鹿騒ぎとなった。就職活動も落ち着き、卒論も大半の学生が書き終えた今の時期、大学4回生が集まると仕方がないのかもしれないが、ゼミの飲み会は徐々に、学生の中でも就職が決まった者と決まってない者、つまり勝ち組と負け組に分かれてのもたれ合いになっていった。就職が決まった勝ち組は就職の決まらない負け組を馬鹿にし、そんな負け組は人生のルールに縛り付けられたと勝ち組の不幸を祈った。一見ケンカのような言い合い。しかしその内心、油断していることがケンジにはわかった。就職が決まっても決まっていなくても、思うような仕事に就けても就けなくても、自立できててもできなくても、誰かが何とかしてくれる、そんな油断の丘の頂からの口げんか。甘ガミの応酬。まるでじゃれ合い、言い換えてもたれ合いだ。まあそう言いながら、ケンジにもその油断が生きていくうえでどのようにダメなのかという具体的にそこにある危機はわからなかった。そして偉そうなことを考えながら、その心地いい生ぬるい言い合いの輪の中に当然ケンジも入っていた。いくら馬鹿らしい集まりと言えど、その馬鹿らしさに拗ねて孤独になる方がマイノリティだというのは常識なのだが、改めて理由を述べると、ケンジはすでに一流企業に就職も決まり、その先には父親が社長を務める会社を継ぐという、一生お金に困らないコースが用意されていた。ガッチリ勝ち組だ。それだけで、ケンジには、はっきり居場所があった。プラス、飲み会は笑いのブロックの上にとれだけ笑いのブロックを積み重ねられるかというゲームだ。崩したやつは負けなのだ。

そのゲームの負けのペナルティは大きい。二度と飲み会に呼ばれない。それはつまり大学生活終了である。それがわからないエリートコースを約束されたケンジではない。

ラッセララッセラと時間は進み、言い合って言い合って、油ものを食べすぎたときのようにこみ上げてくる嫌悪感をお酒で流して流して、気がつくときケンジはべろべろに酔っていた。それでよくここまで気持ちよく酔っ払えたものだ。ケンジはあらためて自分をじっくり褒めた。

そうして、穏やかな気持ちでゆっくり酔いが抜けて行く時間を過ごしていると、飲み屋街とは反対の交差点から、人通りのない飲み屋街はずれの道路にゆっくり運転代行サービスの車が入ってきた。

「まいどー。運転代行サービスで〜す。」

運転代行サービスの車から、見た感じ若い、しかし30歳台であろうとわかる女性が笑顔で降りてきてケンジに声をかけた。

「おーい。ここ、ここ。」

ケンジはホロ酔った感じで女性に返事した。

「あ、お客様、大変お待たせいたしました。」

女性は溶けかけた焼きマシュマロのように座っているケンジに中腰で目線を低くして話しかけた。ケンジはなんだかドキッとした。普段接している同級生にはない大人の色気を感じた。それは単に年齢の問題ではない。ほのかに香る香水に混じる汗の匂いなのだろうか、年上女性の年下の男への接し方なのだろうか、よくわからないままケンジは真面目にトキメいていた。いやいや、何をこんな初恋みたいな、ちょっと酔っ払いすぎだ、ケンジは自分をたしなめた。そして、そんなトキメキを悟られないように、ケンジは少しおどけて言った。

「いや、いいよいいよ。さっきまでベロベロに酔っ払ってたから。待っている時間が、ちょうどいい酔いざましになりました。」

ケンジの想いは良くも悪くも伝わっていない様子だ。女性は運転代行サービスの者としてのビジネスの口調で答えた。

「ありがとうございます。じゃあ、早速、お客様のお車、運転してまいりますね。」

ケンジはなんだかホッとした。

「はい。お願いしマース。・・・って、あれ？」

ケンジはホッとして少し冷静になった。そして違和感に気づいた。

「はい？ どういたしました？」

女性は不思議そうな顔で小首を傾げてきた。ケンジは違和感を素直に口にした。

「あなた、ひとり？」

女性はなんだそんなことかと、安心した様子で答えた。

「いえ、ちがいますけど。」

そりゃ当たり前だ。ケンジは馬鹿げた質問をした自分を恥ずかしく思った。と同時に、雑談ができたことがなんだか嬉しかった。ケンジは微笑みをこぼしながら言った。

「そ、そりゃあ、そうですよね。あー、びっくりした。ねえ？あなた一人だったら、あなたの乗ってきた車、どうするんだって言う話ですよ。いや、失敬、失敬。」

ケンジの謝罪の陽気さと反比例して、女性の顔は曇っていった。

「あー！しまった！」

意外な展開にケンジも焦り出した。

「え？なにになに？」

「お客さんの言うとおりですね。やばーい。どうしよう？」

女性は両頬を両こぶしで挟み体をフリフリして、焦っているのか焦っていないのかわからない焦り方をした。平成生まれのケンジには具体的にはわからないが、俗に言うブリッコだと思った。それにしても何が俺の言う通りなのか、ケンジは不思議に思い尋ねた。

「え？やばいって、なんで？二人いるんでしょ？」

その時、女性が降りたまま開けられていた運転代行サービスの車の運転席その奥の助手席から甘くやわらかく幼い女の子の声が聞こえた。

「ママー。」

ケンジは聞こえたままに驚いた。

「ママ？」

女性はあわてて運転代行サービスの車に駆け寄った。

「まあ、まゆちゃん。おっきしたの？」

ケンジはまたもや聞こえたままに驚いた。

「まゆちゃん？おっき？」

上半身を運転席側から助手席に突っ込んでいた女性が体を起こしケンジの方を向き直ると、女性は1歳ぐらいの女の子を抱っこしていた。ケンジはあまりにびっくりして頭の中が白くなってしまった。放心状態のケンジとしばし見つめ合う幼子を抱っこした女性。瞬間気まずい沈黙。女性は何かしゃべらないとという感じで言った。

「あ、すいません。お客様。えーと、うちの娘のまゆです。」

ケンジの時間が動き出す。

「はい？」

誰このおじちゃん、まゆちゃんは人見知りした様子で言った。

「ママー。」

女性はまゆちゃんを抱きなおすとまゆちゃんをやさしく叱った。

「ほらちゃんと挨拶なさい。」

まゆちゃんの登場で明らかにズレてしまった二人の世界を何とかしようとケンジは大きな声を出した。

「ちょ、ちょ、ちょっと待って！」

「はい？」

女性はキョトンという言葉がとても似合う顔で返事した。二人の世界はなんだかとても離れてしまっている。ケンジは力を振り絞って言った。

「何で赤ちゃんがいるの？」

違う世界にいる女性にはケンジの焦りが伝わらない。女性は微笑みながら話した。

「いやだ、お客様。赤ちゃんではないですよ。もう2歳ですから。ねー？まゆ。はい『にちゃいでちゅー』は？」

まゆちゃんは赤ちゃん的無表情でつぶやいた。

「あねとーね。」

「いやいやいやいや。この子と、あなたと、二人で来たの？」

ケンジは、まゆちゃんの可愛さに常識を持って行かれそうになったが、何とか踏みとどまりたいと根性で質問を返した。しかし、そのケンジの苦労も素知らぬ顔で女性は無邪気に答えた。

「はい。」

ケンジは一方通行感にヘコたれずに言った。

「はいじゃないでしょ！？どうすんの？車運転できる人、あなただけジャン！」

「まあね。でも、いけるんじゃないですか？」

なんだ、この無邪気さは。ケンジは興奮した。

「あのね、よく考えて。まず、あなたが俺の車を運転して俺のウチへ行く。」

「はい。」

「そこからあなたどうするの？」

本当にどうするのか。ケンジは焦り出していた。そして、この焦りを増長させるのは女性の呑気さだとケンジは思った。

「すいませんが、ここまで送ってもらえませんか？」

「え？なにになになに？」

いきなりのとんでもない提案に、ケンジは頭のとっぺんにある栓的なものがスポンとなるのがわかった。

「ですので、私がお客様をご自宅までお送りした後、私をここまで送ってもらえませんか？」

「えっ！？俺が？」

突然現れた魅力的な女性は言いたいことが伝わりません。ケンジは頭を抱えた。しかし、困惑と焦りが渦巻く現状に物語の始まりをかすかに感じてワクワクもしていた。女性はケンジの複雑な心境に沿わず、しかしケンジの深層心理が望むような無邪気さで言葉を続けた。

「もちつ、もたれつで。」

「あのね。」

「もちつ・もたれつ方式で。」

「だから！」

なんだよその方式。てか、どんだけわがままなんだよ。と、ケンジは思った。そう思いながら、これが萌えか、とも思っていた。

「あ、もしかして免許持ってないとか？」

「持ってますよ！」

「でしたら〜。」

なんだろう、この人は。自分がなんで今ここにいるのかがまるでわかってない。ケンジは腹を立てた。萌えながら。

「でしたら〜もなにも、酔っ払ってて運転できないから、あなたを呼んだんでしょ！？飲酒運転絶対ダメ！ストップ・ドリンキング・ドライブ！スターダストレビューも言ってるでしょ？」

ケンジはユーモアを交えて明確に問題点を提示した。さあ、これでこの人も現状に向き合えるでしょう。そして、この不安な気持ちを共有できるはず。ケンジはそう考えながら、素敵な裏切りをどこか期待していた。

「あちや〜。」

無邪気一直線。そんなおどけた女性の仕草だった。ほいきた、ケンジは嬉しくなった。

「あちや〜、じゃないでしょ！」

すると、このやり取りを見ていた女性の娘のまゆちゃんが母親を真似て、つぶやいた。

「あちや〜。」

ケンジは萌えた。

「なに！このかわいい仕草！おじちゃん、ごまかされないよ！」

まるで右に左に打ち分けられる千本ノックだ。ケンジはツツコミに忙しかったが、それがなんだか楽しかった。ケンジは思い出していた。人の役に立ちたいとボランティアで海外の紛争地域に出向き、忙しく働く人を以前テレビで見て、自分の思うようになるならまだしも思うようにならない場所に身を置いて、この人は幸せなのだろうかと疑問に思ったことを。今ならあの人の気持ちが少しわかるかも。愛されるよりも愛したいマジで、でもかまわれない。どうにもならないまな板の上のコイ心よ。そうやって一人身もだえるケンジを運転代行の女性は女王様が踏みつけるような土足感で口を開いた。

「じゃあ、こうしましょう。」

ケンジはどうにでもなれと聞き返した。

「どうしましょう？」

「とりあえず、私がお客様の車を運転して、ご自宅へお送りします。」

「はい、ソコまではさっきと一緒に。」

「そ・の・あ・と、私たちはタクシーでここまで帰ってくると。」

ケンジは、ほいきた、と思った。答えはわかっていたがケンジは尋ねた。

「な・る・ほ・ど。で、そのタクシー代は？」

「追加料金ということで。」

「言うと思った！」

そう叫びながら、ケンジは心の中でガッツポーズをした。

「あちゃ〜。」

「あちゃ〜じゃないって！」

ケンジは嘆いた。嘆く事が、この状況を楽しむの最良の返しだと思ったからだ。思ったというか、本能で悟った。そしてそれは正解だったと次の瞬間気づく。まゆちゃんがまたママの物まねをした。

「あちゃ〜。」

ケンジは一層萌えた。

「おうおう、かわいいね、まゆちゃん。」

そんなケンジの葛藤やまゆちゃんの物まねもお構いなく、考えごとに没頭していた女性はひらめいたとばかりに、より一層の無邪気さで言った。

「じゃあ、こうしましょう。」

ケンジは困り果てたというふうに尋ね返した。内心はウキウキが溢れんばかりだった。

「どうしましょう？」

「とりあえず、お客様はお客様の車に乗っててください。」

おっと、これまでとは違ういいアイデアが出そうだ。ケンジは聞く姿勢をすこしシリアスの方にシフトさせた。

「はい。」

「まず、お客様の車を10メートルほど走らせます。」

「はい。そして？」

「10メートル走ったらとりあえずパーキングへ入れて。」

「はい。入れて。」

「そして、私たちの車に私だけ歩いて戻ります。」

雲行きが怪しくなってきた。ケンジはワクワクした。

「はい。」

「私たちの車には、まゆがいます。」

「はい。」

「まゆはおとなしく、かしこく座っています。」

いよいよ、変な方に話が転がってるぞ。ケンジはより一層ワクワクした。

「はいその、まゆちゃんのくだり、いる？」

「で、その車を私が運転してお客様の車を停めているパーキングまで来ます。」

「はい。」

「その後、また車を乗り換えてお客様の車を10メートルほど走らせてパーキングにいれ、私の車まで戻ってお客様の車のところまで乗ってきて、という、交互に運転してちょっとずつ進むというのはどうでしょう？」

ケンジの頭の中でファンファーレが鳴り響いた。ね？やっぱりはらたいらさんに全部でしょ？そんな爽快感がケンジの体を駆け巡った。ケンジは歓喜で困惑で嘆きの叫びをあげた。

「ろくでもない！ろくでもないよ〜。」

女性はそれでも自信があるように言った。

「でも「よん」ぐらいは、あるんじゃないですか？」

ケンジはその無邪気を通り越して世間知らずな女性の自信にはげしく萌えた。

「なに言ってんの！手間も、時間もメチャメチャかかるじゃないですか！？10メートルごとにパーキングに入れるとか。あ、もしかして、それにかかるお金はもちろん……。」

ケンジは答えがわかっていたが尋ねずにいられなかった。

「追加料金ということで。」

まるでドラマのようだ。ケンジはストーリーのドラマチックさに身悶えた。

「はい出たー。はらたいらさんに全部〜。」

ケンジは感覚で会話してしまった。

「あちゃー。」

女性の無邪気さは一層磨きがかかっている。

「だから！」

ケンジの困り果て具合にも一層磨きがかかった。そのとき、まゆちゃんの一層磨きがかかった物まねが放たれた。

「あちゃー。」

もうケンジは止まらない。

「まゆちゃん。さっきからのそれ、かわいさでウヤムヤにしようとしているんじゃないだろうね？だとしたら、2歳児から素直さを奪い取る今の世の中を憂い、おじちゃん、泣いちゃうよ！」

楽しい。まるでテニスでラリーが続いているように、言葉のやり取りが芯を食って楽しい。ケンジは体の奥から歓喜が湧き上がってくるのをしっかり感じていた。これは恋だろう。ケンジは認定した。こんなに楽しいストーリー展開は意図的でないなら運命としか言いようがない。

「あ！じゃあ、こうしましょう！」

ほらきた。ケンジは再び恋認定を下した。彼女もよりトキメキある方へストーリーが展開するような言葉を投げってくる。これが意図的でないなら運命と呼ばずして、なんと言おう。ケンジの心の中の恋認定士はオペラ歌手のように胸を張った。しかし、そう思った瞬間、別の考えがケンジの頭によぎった。意図的でないなら運命。では、意図的なら・・・。

「いや、もうどうもしない。どうせダメダメ作戦なんだから。」

ケンジは思わぬ気づきに出会い、順調に進むウキウキストーリーに少しブレーキをかけるような発言をした。まゆちゃんが物まねでおどけた。

「あちゃー。」

ケンジは誤魔化すように、幼い子どもの直観力をけん制した。

「まゆちゃん。ごまかしが早い。」

自分の思うように、彼女も自分を想ってくれているのだろうか。ケンジの心臓は火事を知らせる早鐘のように脈打ちだした。そんなケンジの考えにYESともNOとも答えない笑顔で、女性はなおも無邪気に話を進めた。

「今度は大丈夫です。牽引ですから。」

ケンジは女性の変わらない態度に混乱を濃い霧のようなもので隠されている気になった。そしてまた癒されている気もしていた。アメとムチ。妙な快感。ケンジはそんな心地だったのでよく考えることもできず、素直に尋ねた。

「牽引って、あの？」

女性はすこしいたずらっぽく言った。

「ケイン＝コスギじゃないですよ。」

その冗談は、落ち込み気味だったケンジの気持ちを持ち上げてくれた。ケンジは再び、単純に会話を楽しもうという気になった。

「しょうもな～！なにそれ！この俺がですよ、そんな、しょうもないこと考えるわけないじゃないですか！あ～、見くびられたものだ！」

ケンジははしゃいだ。

「つまりね、私の車とお客様の車を繋いで、引っ張っていくワケですね。どうです？いい作戦でしょ？」

ケンジの心の浮き沈みも全く知らない気付かないように女性は話した。どうです、私、頭いいでしょ、と言わんばかりに、エッヘンと言わんばかりに胸を張りながら。かわいい。ケンジはあらためて思った。そして、あれこれ考えるのは止めようと思った。彼女との会話を楽しもうと決意なおし、ケンジは言った。

「まあ、まあまあ、いいですよ。いいアイデアですよ。」

女性は嬉しそうにとび跳ねた。

「イエーイ！」

それを見てケンジの心も飛び跳ねた。しかしそれを表に出さず、ケンジはため息交じりに言った。

「でもね、俺だんだんわかってきました。ちなみに、その車を繋ぐワイヤーのようなものは・・・？」

女性は無邪気に答えた。

「持ってません。」

ケンジは、ビンゴでカードがめくれるときのような快感を感じた。

「ハイ出たー。アタックちゃんす！」

女性はぽんと手を叩くと、指を一本立ててケンジに提案した。

「あ、でも、いい方法がありますよ。」

ケンジは、その指に停まりたい気持ちを隠して、尋ねた。

「一応、聞きましょうか？」

女性はおもむろにケンジの両手を握り自分の胸のあたりに持ってきて言った。

「お客様の右手が私の車を握り、左手がお客様の車を握る。」

ケンジはその手を面白さとして隠しの為わざと荒く振りほどくと、ツッコんだ。

「なるほど！人間ワイヤー！アホか！」

「え～！？なんでですか～？」

女性の口調が無邪気さが過ぎて駄々っ子のようになってきた。ケンジはますますノリに乗り出した。女性もそうなのかもしれない。ケンジは祈るような気持ちで会話を続けた。

「俺は、びっくり人間ですか！？白いギターがもらえるんですか！？」

「そんなに凄いことなの？」

「想像できない？あ～、なるほど、他人事だから。だったら、まゆちゃんが人間ワイヤーやっていると考えてみなさいよ。」

女性は少し考えた。いや、これも考えるフリなんだろう。ケンジは思った。

「え～と、まゆが・・・、ぷふふ。」

「そんなにご機嫌なこと！？」

おいおい、フリにしても笑う事ないだろう。仮の話とは言え、自分の子供がひどい目にあう話だぞ。ケンジは突き抜けすぎ度合いが思った以上だったので、驚いた。

「大岡裁きみたい。」

ああ、そうか。この人の無邪気さや柔らかい雰囲気は、この呑気さから来るんだ。嬉しいやらあきれれるやら。ケンジは脱力してつぶやいた。

「まあ、のんきなあさん。」

すかさずまゆちゃんがツッコんだ。

「あちゃー。」

ケンジはまゆちゃんに感心した。

「うん。ここの「あちゃー」は合ってるよ、まゆちゃん。」

「じゃあ、どうするんですか？」

女性はすこしふてくされていた。なんで怒ってるの。ケンジはあまりのわがままっぷりにトキメキながら呆れていた。まゆちゃんですえ、この短期間にあちゃーのタイミングをマスターする成長を見せたのに、この人はなんで少女のような純粹無垢さを保っているのか。まさか、やっぱり、意図的に……。ケンジの心は先ほどの困惑の考えを復活させてしまった。

「え〜？まさかの逆切れ？」

甘えたような、妙なものの言い方になってしまった。ケンジはちょっと恥ずかしく思った。女性はなおもふてくされた口調で続けた。

「お客様もダメダメばかり言ってないで、なにかアイデア出してくださいよ。」

「え〜？俺のせい？俺の責任は1ミクロンもないよ。」

ケンジの嘆きが夜の駐車場前に響いた。その残響の中、ケンジの心には楽しさと哀しさが手をとってグルグル回っていた。ケンジは楽しかった。今まで何人かの女性と付き合ったけれど、話しているだけでこんなに楽しいという事はなかった。なぜ、こんなに会話が弾むのだろう。ケンジは考えた。運転代行サービスという会社の従業員とお客という関係だからだろうか。年上の女性という、今まで接したことのない人種の新鮮さだろうか。まゆちゃんという家族を知り、その家庭環境、つまり素の部分を知ったという親近感からだろうか。ケンジは考えつくだけの理由を並べたが、そのどれもが正解でどれもが不正解な気がした。ケンジは頭を強く振った。違う。この人だからだ。俺は自分の運命の人と出会ったのだ。赤い糸で結ばれた運命の女性と知り合ったのだ。ケンジは確信した。若さゆえの思いこみ、それも結構。人妻・子持ち、どんとこい。ケンジはこの女性をもっと深く知りたいと思った。付き合いたいと思った。ケンジは自分の欲望が燃え上がるのを感じた。こんなにアツくなったのは初めてだった。そこまで考えが至った瞬間、ケンジは気づいてしまった。この楽しい会話は終わるのだと。自分が家に無事帰ったとき、この楽しい時間は終わるのだと。今、二人の関係は運転代行サービスとそのお客の関係。送り迎えの契約で繋がっているのだ。だから、その契約が終了すると二人の繋がりも切れてしまうのだ。

そんなケンジの不安定さに喝を入れるごとく、まゆちゃんがくしゃみをした。

「クシュン！」

女性は驚いて我が子を抱きよせた。まゆちゃんはママの胸にちょっと深く埋まった。

「あら、まゆ、大丈夫？」

「ママ。」

まゆちゃんのクシャミはケンジに迷っている時間がないことを教えてくれた。ケンジはある決意を胸に、しかし表面的にはコレまでの振り回されて困っている男の感じで話した。

「おいおい、こんなことやってる間に子供が風邪ひいたらバカらしいぞ。」

女性は無邪気さに不安さをにじませた。ケンジはそれを見て一層守りたくなった。

「そうは言ってもね。困ったね〜。」

「ママ〜。」

ケンジは作戦を執行した。

「・・・はあ〜、わかりました。俺がなんとかしますよ。」

女性からは今までとは違う雰囲気が出てきた。

「なんとかって？」

ここが女性とこれから付き合えるかどうかの分かれ道だとケンジは手に汗を握っていた。本当は誠実に真剣にストレートなお願いをするのが一番なんだろう。ケンジはわかっていた。それでは女性と自分のコレまでの楽しい会話が無駄になってしまう。一か八かになるとしても、ここは今まで続けてきた仲良く喧嘩するテイストの会話で誘うべきだと。ケンジはなるべく自然を装って話すことを務めた。心の熱がバレるかどうかは別の話で、ここではそうすることがエチケットのように思えたからだ。などと紳士ぶってみたが、ケンジは恋心とかそれより原始的な下心でギンギンだった。ケンジは期待に胸も膨らませながら女性を誘った。

「とりあえず、俺の車で俺の家に行きましょう。タクシーとかは、お金なくてちょっと無理なんで、俺の酔いが醒めたら送っていきますから。」

ケンジの言葉に、女性は誕生日を忘れていた人がいきなり祝われたような顔をして驚きながら言った。

「え？いいんですか？」

この展開を期待していたのか。そんなものはどうでもいい、ケンジは思った。そしてケンジは続けて言った。

「その代わりに、俺、飲酒運転は絶対いやなんで、酔いが醒めるまで、俺ん家でちょっと待ってもらいますよ。」

ケンジは強く言いきった。酔いが醒めるまでの間に何をするかは全く考えてなかったし、期待もしていなかった。ただ少しでも長い間一緒に居たい、そう思っていた。この想いに女性はすこしでもトキメキを返してくれるだろうか。ケンジは女性を見つめた。女性はほんの少し申し訳なさそうに言った。

「いや〜、何だか悪いですね。あ、そうだ！」

女性は何か考え付いたことがあるようだった。ケンジは尋ねた。

「なに？」

女性はいたずらっぽく笑うと、小さく右手を上げ、選手宣誓するようにケンジに言った。

「せっかく家にお邪魔するなら、私、何か作ります。」

「何かって？」

「私こう見えて料理得意なんですよ。ね～、まゆ？」

女性はまゆちゃんを覗き込みながら話した。まるで許しを得ているようだと言った。ケンジは思った。さっきまで母親の胸の中で寒さに丸くなっていたまゆちゃんがはじけるように笑いながら叫んだ。

「シュープッパ！シュープッパ！」

「はいはい。スープスパね。それでいいですかね？」

女性はまゆちゃんの頭をなでながら言った。そしてケンジに笑いかけた。ケンジは運命の底引き網がグンッと重くなるのを感じた。

「いや、いいもなにも、ソコまでしてもらって、なんだか申し訳ないです。」

女性はなおもいたずらっぽく笑いながら言った。

「いいえ。もちつ・もたれつ方式。」

この言葉を聞いて、ケンジは、女性が自分の事をどう思っているのかわかった気がした。ケンジの心は高揚したまま穏やかになった。

「あ、なるほど。」

女性の告白と思われる冗談にケンジはうまく答えることができなかった。ケンジは自分の幼さがすこし恥ずかしくなった。女性はケンジのそんな心を見抜いているようだった。年上の包容力で包み隠すように、女性は言葉を続けた。

「じゃあ、行きましょうか。とりあえず、深夜も開いてるスーパーがありますから、そこ寄って、そして家に行きましょう。いいですか？お客様。」

ケンジは年上の女性の包容力にうっとりした。出会い初めからカッコつけなくていいなんて、こんなに素敵な恋はない。ケンジはすさまじい安心を感じていた。そしてその安心が大きくなるほど、それに甘えてはいけないという自立心が大きくなっていった。自分が立派に一人前になって、この人を養っていかねば。ケンジの責任感はどんどん大きくなっていった。それはもはや恋愛という関係では済まないほどだった。ケンジはプロポーズにも似た覚悟で名乗った。

「ケンジです。」

相変わらずの無邪気さに少しシリアスさが混ざった顔で女性は聞き返した。

「はい？」

ケンジは小さく息を吸い込むと、改めて力を込めて名乗った。

「俺の名前、ケンジです。」

それを聞いて、女性は何かを受け止めるように微笑みかけながら言った。

「うふふ。了解。じゃあ、行きましょうか？ケンジさん。」

ケンジ自然に笑顔になった。

「はい。」

これが、まゆちゃんのママとまゆちゃんにとっての2番目のパパとの出会いでした。